

話術

2025.7.15

学校に限らず、先生と呼ばれる人たち、あるいは経営者やリーダーに求められるものがある。その一つが、「話術」である。日常の仕事において、どのくらいの人たちに、どのくらいの時間にわたって話しているだろうか。

話術というと、テクニックというイメージがあるかもしれない。ときには、人をだますときに使うもののようなイメージもある。話術には、少なからず負の要素がつきまとう。だが、その一方で、術というと、それ相応の高いレベルを表しているように思う。だから、話すのは簡単だが、話術というと一段階も二段階も上がった高い段階を指しているように感じる。

話術を磨いていこうとするならば、まずは、言葉である。どんな言葉を使うのか。これが重要でありむずかしい。言葉のメッセージを磨く。それだけでは足りない。実は、言葉を超えたメッセージを発する力を磨いていかなければならない。すなわち、人格、位取り、胆力、演技力、観察力、対話力、振る舞い、発声、余韻、思考などの力量である。だから、言葉やメッセージは、何を話すかではなく、誰が話したかのほうが大切なのである。

これらの力量は、いずれも深く人間力に結び付いている。そのため、話術を磨く修行を続けていくと、それは自然に、そして必然的に、人間を磨く修行になっていく。

この7月は、話術を磨く修行の場をたくさん与えていただいている。すべてが、人間を磨く修行の場でもある。短くて80分、長いもので150分である。これだけの時間をいただいているにもかかわらず、先生方の中に何も残らなかつたとしたらどうであろう。講師失格である。いや人間失格である。太宰治になってしまう。

同じ内容を伝えるにしても、構成、話す順番を考えなければならない。聞く側になって、わかりやすくなるよう努めなければならない。いかにしたら、説得力を伴つた話ができるのか。納得や共感を得られるのか。

同じ内容で、同じ時間、話したとしても、話す人によって伝わり方が全く違ってくる。中には、〇〇節と言われるような話し方をする人もいる。これも一つの話術であろう。私の場合は、自分で意識していないが、国語の授業を参観し、指導助言を行う際に、高澤節になるらしい。いつも以上に、身振り手振りを交えて、熱く語っているのかもしれない。自分としては、わかってほしい、授業をえてほしいという思いが強いのだと思う。

あと1回残っている。過去3回の反省を踏まえながら、与えられた150分を高澤節、いやショーにしたい。すべてを出し切るつもりである。そこには、話術が必要となる。人間修行の場である。全力で臨まなければならない。